

受付No.

## 2026年度 アートによる地域振興助成（スタートアップ）

公益財団法人 福武財団 理事長 福武英明殿

募集要項に則り、本応募用紙に記載した通り、標記助成に応募いたします。

## &lt;団体プロフィール&gt;

団体名	宮本常一Photo Project in下北実行委員会				
住所	〒030-0813 青森県青森市松原3-15-25-1-708太田原潤方				
団体区分	実行委員会	スタッフ数	5名		
代表者氏名(カナ)	オオタハラ ジュン	役職	実行委員長	年代	60代前半
代表者氏名	太田原 潤				
団体URL1	なし（開設検討中）				
団体URL2					

## &lt;申請者・実務担当者&gt; ※団体所在地と同じ場合は「同上」\*申請者には、助成に関する諸手続きの連絡担当者の名前を記入してください。

申請者氏名(カナ)	オオタハラ ジュン	役職	実行委員長	年代	60代前半
申請者氏名	太田原 潤				
連絡先 e-mail	aru9miru.ki9@gmail.com	電話番号	090-9749-4971		
住所(書類の送付先)	同上				

## &lt;プロジェクトリーダーの略歴&gt; ※アートプロジェクト等の運営経験や当時の役割を記載してください。

氏名(カナ)	氏名	役職/肩書	年代	
オオタハラ ジュン	太田原 潤	実行委員長	60代前半	
年(西暦) 月	略歴(活動内容)			
2000年8月	新潟県立歴史博物館開館特別展「ジヨウモネスクジャパン」展示映像撮影協力			
2006年10月	青森県立美術館開館記念展「縄文と現代」出展対応、展示協力			
2019年10月	国立歴史民俗博物館の「モバイルミュージアム」を用いた青森県外ヶ浜町での巡回展の企画運営全般			
2021年7月	横浜市歴史博物館・神奈川大学日本常民文化研究所共同企画展「布 美しき日本の手仕事」の図録に寄稿			
2025年11月	静岡県立近代美術館(県民ギャラリー)「ホルスト・ヤンセン 初期ポスター展」展示図録作成協力			

## &lt;福武財団の助成実績&gt;

助成を受けて活動した年度

## &lt;外部協力者の状況&gt;

氏名	年代	組織名	所在地(市町村まで)	協力内容(できるだけ具体的に)
高橋しげみ	50代前半	青森県立美術館	青森県青森市	所属館は宮本常一写真の一部を所蔵。美術展開催に関する豊富な経験に基づく指導・助言等、プロジェクト全般に協力。
小山隆秀	50代後半	青森県立郷土館	青森県弘前市	学芸課長で下北での豊富な民俗調査経験がある。宮本常一の写真に写る様々なモノや風習などの内容理解に関する助言で協力。
中村絵美	30代後半	NPO法人アーツセンターあきた・秋田市文化創造館	秋田県秋田市	これまで青森県に着想を得た作品も発表しており、下北半島での活動も予定している現代アート作家。プロジェクトの活動や作品出品などで協力。
鷲岳彰丸	60代前半	むつ市教育委員会生涯学習課	青森県むつ市	川内地区特集展示、脇野沢地区特集展示の会場確保や関係各所と調整、むつ市全域へのプロジェクトの周知に協力
田中喜久美	80代	脇野沢ボランティアの会	青森県むつ市	宮本常一が多くの写真を残したむつ市脇野沢地区のボランティア団体の会長。豊富な活動実績があり、地域特集展示の周知や、宮本写真の内容理解で協力。

## <活動内容・事業計画について>

表現手法	コミュニティアーカイブ
活動テーマ	へき地（の地域振興）
事業名	宮本常一Photo Project in下北
2026年度の活動期間	2026/04/01 ～ 2027/03/31
活動に従事するスタッフ数	5名

### 1. 団体の活動の概要

<p>本団体は、2026年度から新たに行う「宮本常一Photo Project in 下北」のため実行委員会である。委員には、下北半島で地域に根差した独自の活動を行っている「うそりの風の会」（下北の歴史・民俗・芸能等の調査研究、会誌発行）、「下北を知る会」（下北の自然・文化・歴史等の学習、下北検定の実施）、「NPO法人シェルフォレスト川内」（自然学校、文化芸術等の催事開催）、「カメラクラブ悠々」（下北の風景、動植物等の撮影、写真展の開催）において中心的な役割を担っている人材の参加を得、それぞれの出身団体での経験を生かして今後の事業を展開する。3年計画の初年度となる2026年度の企画展開催に向け、現在は準備作業を行っている。</p>
---

### 2. これまでの活動の沿革

申請事業の活動年数	0～1年
年（西暦） 月	活動内容
2025年7月	事業内容検討
2025年8月	情報収集及び事前準備
2025年9月	実行委員の人選、資料調査
2025年10月	実行委員会の設立、関係各位、各所と調整

### 3. 活動エリアについて

活動エリア	青森県 むつ市、下北郡（大間町、佐井村、風間浦村、東通村）
活動エリアの特色（歴史、文化、地域性、魅力など）	活動エリアは青森県下北半島の最奥部、本州最北端の5市町村にまたがる。津軽海峡、陸奥湾、太平洋と特徴の異なる三つの海に囲まれ、豊かな自然環境と独特な文化が育まれた地域でもある。本州最北、日本最北、世界最北で形容されるものも多い。縄文時代以来北海道との交流も活発で、近世・近代には北前船も盛んに往来し、港を通じて他地域の文物も流入した。その影響が祭りや伝統芸能にもみられ、それが根付き、継承されているのも魅力の一つである。また、日本三大霊場の一つ恐山は、地元で独特な信仰を形成するとともに、全国からの参詣者も集めている。近年は下北ジオパークの活動も盛んで、地形、地質を通じた魅力の掘り起しも進んでいる。
活動エリアの課題（まず初めに、活動エリアにおける課題を簡潔にご記載ください。続けて、その課題の背景や詳細について、できるだけ具体的にご記入ください。）	海路の衰退とともに交通不便地と化し、人口減少、少子高齢化の進行が課題だが、半島奥部、本州最北端という地理的特性は、その傾向に拍車をかけている。過疎地の大半では担い手不足から祭りや伝統芸能も衰退しがちだが、下北半島ではそれがよく残されており、地元で深く愛着を持つ人が多い一方、「下北には何も無い」と悲観している人も少なくない。行政は企業や大学の誘致に努めているものの、若年層の流出に歯止めがかからないのは、地元の人々に「下北にあるもの」が見えなくなっているという側面があると思われる。実際には何気ない日常の中に多くの「下北の良さ」がある。埋没しかけたそれらに気づくことができているのが課題である。
貴団体の地域に対するミッション（活動の目的）	宮本常一は戦前、戦後に10回下北半島を訪れ、膨大な数の写真を残したが、下北ではそれがあまり知られていない。宮本写真は、昭和の下北の日常を外からの眼で繰り返し捉えた貴重な記録である。「歩く、見る、聞く」を実践した宮本の写真と現在を比較すると、大きく変わったもの、変わらずに残されているものがよくわかる。単に懐かしさを感じるだけではなく、多くの気づきが得られる写真でもある。本団体は、撮影された地域で事業展開することで地域の人々に宮本の人となりと写真を知ってもらうとともに、それを通じて地域の人々が将来世代へ残したいもの、他者に伝えたいものを深く考える契機を作り、それを自分なりの手法で表現する場を作る。

4. アートプロジェクトならではの新しい表現への挑戦や、新しい発想にもとづく社会課題解決への試みなど、アピールポイントをお書きください。

宮本常一の写真展は下北半島で初の開催となる。都市部ではなく、被写体となった地域に入り込んで企画展を開催することで、その地域の活性化にも貢献したい。今回の事業は単なる展示では終わらない。写真を通じて残したいもの、伝えたいものを考え、自分なりの手法で表現することを目指す。現代アート作家の参加も得て、内からの眼に加えて外からの眼でも下北を再認識する機会を作る。宮本の写真は自ら聞き取りした話で肉付けされているため学術資料としての価値も高いが、下北の記録類の多くは失われている。詳細不明の被写体の情報は今を逃すと知る機会を永遠に失う懸念もある。少子高齢化は課題ではあるが、本事業では高齢者が多いことをポジティブに捉え、昭和の下北を知る方々の積極的な参加を得て交流を深めることで、宮本写真の潜在力を引き出し、資料的価値を高めることにも挑む。それを地域アーカイブとして次世代に継承し、学術研究への貢献も目指す。

<今年度の活動について>

5. 2026年度の活動の具体的な方法（前記のミッションを実現するための表現方法や参加アーティストなど）

3年計画の初年次となる2026年度は、2027年度事業、2028年度事業へとつなぐ基礎固めの年と位置付け、企画展「あるくみるきく“旅する巨人”宮本常一が写した昭和の下北」を3カ所で行う。会期は各会場10日程度を見込む。場所を変えて同じ内容で展示するのではなく、宮本写真を撮影地ごとに分け、撮影枚数の多いむつ市川内地区、むつ市脇野沢地区、佐井村の3カ所で、その地区の写真で構成した地域特集展として行う。スタッフを配置して常時見学者との情報交換を可能とする他、各会期終盤に講座と交流座談会を開催し、写真の内容把握に努めるとともに、後世に残したいもの、他者に伝えたいことなどを地域の人々と語り合う。展示や講座には宮本常一記念館、青森県立美術館、青森県立郷土館の学芸員の協力を得るとともに、作品出品を念頭に、現代アート作家の中村絵美氏の参加も得る。また、より多くの地域住民の参加を促すため、「脇野沢ボランティアの会」などの地域団体の協力を得る他、事業の周知には、コミュニティ放送の「FMアジュール」、「東奥日報」などマスコミ関係、自治体広報誌の協力も得る。会場については開催地の地元教育委員会及び指定管理者の協力を得る。

6. 2026年度の実行計画（目標を実現するために、いつ・どこで・何を実現するのか）

年 月	活動内容
2026年4月	宮本常一記念館資料調査、協議
2026年5月	使用写真選定、仕分け
2026年6月	使用写真出力委託、広報物作成
2026年7月	第1回企画展準備
2026年8月	第1回企画展「あるくみるきく“旅する巨人”宮本常一が写した昭和の下北」 脇野沢地区特集展示を開催
2026年8月	第1回企画展会期終盤に講座、交流座談会を開催
2026年8月	第2回企画展準備
2026年9月	第2回企画展「あるくみるきく“旅する巨人”宮本常一が写した昭和の下北」 佐井村特集展示を開催
2026年9月	第2回企画展会期終盤に講座、交流座談会を開催
2026年9月	第3回企画展準備
2026年10月	第3回企画展「あるくみるきく“旅する巨人”宮本常一が写した昭和の下北」 川内地区特集展示を開催
2026年10月	第3回企画展会期終盤に講座、交流座談会を開催
2026年8月	企画展各回の講座に講師、アーティストを招聘
2026年11月	11月までのいずれかの時期に宮本常一記念館学芸員を招聘
2026年11月	企画展各回使用写真の整理
2026年12月	企画展各回及び交流座談会で得た情報のまとめ
2027年1月	次年度計画に向けた調査
2027年2月	次年度企画展で使用する写真の選定
2027年3月	次年度企画に向けた宮本常一記念館の調査

## 7. 2026年度プロジェクト評価の観点や指標をどのように設定しますか。

定性（状態的な目標）、定量（数値的目標）をお書きください。

〔定性的な目標〕

- ・宮本常一の業績の周知：宮本常一の人となりや宮本が下北の写真を多数残していることを地域の人々が知っている状態。
- ・地域への関心の深化：宮本写真により、昭和期の地域の状況を振り返り、今と比較することで地域への関心を深化させ、地域の将来を考える契機を得ることができている状態。
- ・催事への参加促進：普段都市部に出かける機会が少ない人や交通手段を持たない人でも参加しやすい状態。
- ・交流の促進：主催者側と見学者の交流のほか、写真を通じて見学者同士の交流を促し、相互の親睦を深めるとともに、世代間交流が促進される状態。
- ・研究への寄与：交流の中から被写体に関する情報を得て宮本写真がもつ資料的価値を高め、民俗学、歴史学、地理学、社会学等に活用可能な状態。

〔定量的な目標〕

- ・開催時期と回数：地域特集展の開催は内容と地域を変えて3回とし、開催時期については、積雪期を回避していずれも11月までに行う。
- ・展示写真の枚数：各会場100枚以上の写真を展示する。
- ・情報収集：各会場ですべて3割以上の写真に対して何らかの情報を得る。
- ・積極的な参加：交流座談会には、地域住民を含めて各会場30名以上の参加を得る。

## 8. 2026年度の翌年以降の、地域に持続的に関わる中期計画と将来ビジョンをお書きください。

※一般申請者は、その計画・ビジョンの展開がこれまでの活動の積み重なりどのように紐づいているかと、その展開に事業や運営体制をどのように反映していくかについてもお書きください。

2026年度に引き続き、2027年度は別地域2カ所ですべて特集展示及び講座と交流座談会を行う。その後、下北の中心むつ市において2カ年の総括展示を行う。また、それに併せ、シンポジウム「宮本常一が写した昭和の下北、菅江真澄が描いた江戸の下北」を開催する。菅江真澄は宮本より約200年前に下北の旅をし、図絵と文で下北を記録した人物で、宮本は『菅江真澄全集』等の編者でもある。宮本の旅には菅江真澄の影響も見られるが、大きく時を隔てた二人の旅人の表現を通して過去と現在の下北を見つめ、未来に何を残すべきか、何を伝えたいかを考える機会とする。シンポジウムは宮本常一誕生120年記念とも位置づけ、講師には実行委員長その他、石井正己東京学芸大学名誉教授、昆政明元神奈川大学特任教授を予定している。

2028年度は、宮本常一の「歩く・見る・聞く」をオマージュした企画のウォークイベント「聞く・見る・歩く 宮本常一の足跡をたどる」と、公募展「歩く・見る・〇る（〇く） 残したい・伝えたい“私の下北”」を開催する。それまでの2年の活動を受け、それぞれが歩き、見たことによって、残したい、伝えたいと感じた“私の下北”を、「撮る（写真・動画）、録る（録音）、彫る（版画）、貼る（貼り絵）、作る（造形）、描く（絵画）、書く（文章・詩歌）等、様々な手法で表現した作品を公募し、展示する。それらは下北の内側からの視点のものが多くなることが予想されるが、外側からの視点として現代アート作家中村絵美氏の作品もコラボさせ、今の下北、未来の下北を考える機会とする。

2029年度以降は、実行委員がそれぞれの所属団体に3年間の活動の成果を取り込み、活動に生かす。

## 9. 2026年度以降、複数年の助成を希望していますか？

はい



